ー第２回　第２回 東日本大震災子ども支援ネットワーク主催シンポジウムー
子どもたちと一緒に考える被災地の復興支援の今後
2013.1.13 於：東洋大学白山キャンパス　　開催報告（概要）

今回のシンポジウムでは、子どもたちと一緒に被災地の復興支援について考えるために、岩手県山田町ゾンタハウスを利用した高校生６名と、宮城県南三陸町戸倉中学校を卒業した高校生４名、現地からの支援者２名が招かれ、会場には議員や市民ら約 120 名が集まった。被災後の報告などを受けて東洋大学森田明美ゼミの学生や大学院生７名が２グループ、戸倉中学校卒業生４名が１グループに分かれ、おとなたちが加わって、被災地の今後の復興支援について意見交換がなされた。

以下に、当日の様子をそのままの形で掲載させて頂く。

１．岩手県山田町ゾンタハウスを利用した女子高校生３名と東洋大学の学生・大学院生のファシリテートによるグループ

□ゾンタハウスは高校生になっても交流の場所

Ａさん「中学校まではいつも一緒にいた子でも、高校が違えば会う機会もない。時たま、ゾンタハウスに来て中学校同じだった子たちと中学校の思い出話をしたり、こんな勉強してるとか、今の高校生活をお互いに教え合える。」

□見守ってくれるおとながいる。

Ａさん「やっぱり、いるのといないのでは、全然違う。誰もいない部屋でひたすら勉強しても、正直、わかんないでそのまま答え写す感じ。東洋大の人とかおとながいてくれれば、計算方法や定義を教えてもらえる。」

□地域交流の場所

Ａさん「(今まで)ほとんど近所の人との関わりはなかった。ゾンタハウスで、おじいさんおばあさんが時たま顔を出してくれて、自然に笑えるし、逆に近所の人たちも私たちの頑張るところを見て、元気になってもらえたら嬉しい。」

2．岩手県山田町ゾンタハウスを利用した男子高校生３名と東洋大学の学生ファシリテートによるグループ（浜田進士さん参加）

□無料の軽食について

Ｅくん「軽食は大事。気分転換になる。」

Ｆくん「お腹空いちゃうし、遠くから来る人は一回帰るのに時間かかるので助かる。」

□学年を超えた交流の場所

Ｄくん「中学校ではクラス間の行き来が出来ない。ここに来れば、今日隣のクラスがどんな感じだったか聞くことが出来る。」

□高校生の居場所の必要性と大学進学への不安

Ｅくん「(大学受験のために、またゾンタハウスに通いたい。勉強メインで。「山田が大好きなんで、(大学から)いつでも帰れる距離にはいたい。学費のことは不安だらけ。」

3．宮城県南三陸町戸倉中学校を卒業した高校生４名とキッズドア片貝英行さんファシリテートによるグループ（林大介さん参加）

□今後の物資支援の見直しの必要性

Ｇくん「（震災から）今年で３年が経ち、支援物資が届き、そのまま残るといった現状も。狭い仮設では物資をどうしたらいいのか困る。」「1 年間被災地で支援をしてきて、被災者の意見を取り入れながら、どのような物資が欲しいか等の意見をヒアリングして、次に来る時に必要な物資を持ってくるといった支援のあり方があるといいと思った。」「一方的に支援が来る形が多く、実際に意見を言える現状ではない。」

□子どもたちの発言の場を！

Ｈくん「今まで地域おこしについて考えてきて、復興復旧に携わりたい気持ちがあるが、勉強をしたり考えをまとめたりするだけではなく、こうした発表する機会が増えて欲しい。」

Ｊさん「 自分たちがもっと積極的になる事が必要だが、行政側でも受け入れる体制を作って欲しい。仮設が狭い問題を行政に伝えても、放置されている。おとなの話も受け入れてくれないということは、子どもの話はもっと耳を傾けてもらうないと思う。」